

儒学・術数・方技を結合する——元人朱震亨の達成と挫折

水口拓寿（武蔵大学人文学部教授）

元代の「儒医」として知られる朱震亨（朱丹溪）に、風水を主題とする『風水問答』という著作がある。彼は同書において、まず医学の古典である『黄帝内経素問』に典拠を求め、天気（天から下降する気）が人の誕生や生存に不可欠だという方技的言説を示した。次に、天気が人に禍福をもたらすという術数的言説をそこに加味し、地気ではなく天気を適切に受けることを課題とする、新しい型の陽宅風水（住宅を対象とする風水）を作り上げた。彼はまた、『詩経』と『書経』に典拠を求め、自身が更新した風水的宇宙観の外部から、陽宅風水という術数を権威づけた。両経典から彼の読み取った教説を結び合わせ、かつて聖賢が陽宅風水を、天意に従って制作したという論理を導き出したのである。更に、程頤・朱熹の心性論に典拠を求めて、人が土地の吉凶を認知でき、故に陽宅風水が術数として実践可能であることを、天が人の心に具わっているという理由のもとに立証した。『風水問答』には、天は善人に吉地（人に福をもたらす土地）を与え、悪人に凶地（人に禍をもたらす土地）を与えるという道徳的な戒めも見られるが、そこでも天が人の善悪に応じることが、他ならぬ道学型の天人相関論によって説明づけられる。他方、彼は陰宅風水（墳墓を対象とする風水）に関して、墓中の遺骨が天気に接触できないという認識と、儒教経典や道学文献が陰宅風水を支持していないという見解を示し、即ちそれは、陽宅風水の肯定論と同じ論理的基盤のもとで否定される結果となった。

朱震亨は、医学文献の所説を応用して風水理論を更新するという形で、術数と方技の間に架橋を試みたと言える。なおかつ、風水という術数の一分野を、儒学を頂点に置く諸学芸の体系中に定位することにも、積極的であったと言える。しかし、このようにして儒学・術数・方技を結合する試みは、当時においても後世においても評価に恵まれなかった。